

韓国における偽史言説の「大衆化」とメディア

朴 起 兌

【要約】 本稿は、先行研究が抱える「偽史言説が広まる背景の学際的検討の不足」と「歴史大衆化と偽史批判との関係性の検討不足」という二つの課題に応え、韓国における偽史言説の「大衆化」を、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけてのメディア環境の変化を軸に考察する。偽史言説が一九九〇年代に大衆文学の商業性を取り込み、二〇〇〇年前後にはインターネットの普及と愛国主義の高揚を背景に拡大した過程を分析した。また、メディア環境の変化により、次第に多くの人々が偽史言説の消費者としてだけでなく、生産者としても関与するという一貫した流れが形成されたことを明確にし、偽史言説の批判者と信奉者の対立が激化したことも示した。これにより、偽史言説の「大衆化」がメディアとの相互作用によってどのように進んだのか浮き彫りになった。本稿は、これらを通じて偽史言説の変容を長期的視点で捉え、メディアとの関係を動態的に解明している。

史林 一〇八巻一号 二〇二五年一月

はじめに

本稿の目的は、韓国における偽史言説の「大衆化」を、二〇〇〇年前後のメディア環境の変化に着目して検討することにある。ここで「大衆化」とは、特定の言説や知識が一部の専門家を超えて、広く一般大衆に共有され、消費されることを指す。

日本には詳しく知られていないが、韓国にも多数の偽書や偽史言説が存在している。それらは量的には日本ほど多くないかもしれない。しかし、少なくとも一九八〇年代以降において、社会全般への影響力は刮目に値する。ここで「偽書」とは、呉座勇一が述べているように「作者・成立年代・書名などを偽った書物」を指す。^①一方、「偽史」とは、小澤実が述べているように「近代学問の承認を経た歴史に対抗するオルタナティブとしての物語」を指す。^②韓国では「偽史言説」という表現は使われておらず、「類似歴史学」または「似而非歴史学」が歴史学界を中心に二〇一〇年代から用いられているが、その意味と用法は日本の「偽史言説」とほぼ同義である。偽史言説の信奉者たちは、歴史学の名を借りて「嘘」を「真実」であるかのように主張し、一般大衆を欺くだけでなく、研究者や学界にも多大な被害をもたらしてきた。これに対する歴史学界の問題意識と危機感が、二つの用語に強く内包されている。

このことから分かるように、現代の韓国では日本の「偽史言説」に相当する言葉として、歴史学との対立関係を前提とした用語が使用されている。その背景には、偽史言説が「大衆化」され、社会全般に強い影響力を持つようになったという事実がある。実際、「歴史大衆化」に関する議論（二〇一七年）において、ジョン・ヨンウクによってその事実が指摘されている。^④韓国において「歴史大衆化」とは、研究者などの専門家によって検証・生産された歴史関係の知識や物語を専門家ではない大衆に広く発信・共有する行為を指す用語として定着している。この過程で生み出された大衆向けの文章、文学作品、ドラマ、ドキュメンタリーなど、歴史コンテンツを大衆が受容し消費するに至る一連の過程と実践をも含む概念でもある。当然ながら、偽史言説に基づいて制作されたドラマなども歴史関係のコンテンツになり得るが、それは歴史学界で想定する「大衆化」の対象には含まれない。学界で想定する「歴史大衆化」は、専門家による検証済みの知識が大衆に共有される理想的な過程を指すのに対し、偽史言説の「大衆化」は、未検証または誤った歴史知識と歴史関係の物語が広範囲に浸透し、時に「正しい歴史」として受容される現象を意味する。「歴史大衆化」をめぐる議論は、いわゆる「パブリック・ヒストリー」とも深く関わっており、メディア環境が急激に変化し、歴史資料が利用しやすくなった一九

九〇年代以降、活発に行われてきた。

これまで「歴史大衆化」は韓国の歴史学界における課題の一つとして認識されてきたが、偽史言説は早期から「大衆化」を達成したと見なされている。例えば「本屋に行ってみると古代史関係の本の七〇八割はトンデモ本である」^⑤状況で「植民地期以降」歴史学を通して大衆と直接コミュニケーションを行ってきたのは概ね『似而非歴史学者』であった^⑥と指摘されている。さらに、二〇〇〇年代以降に放送された大河ドラマ『淵蓋蘇文』(SBS、二〇〇六―二〇〇七年)や『百済の王クンチョゴワン』(KBS、二〇一〇―二〇一一年)などにおいても、古代韓国の王朝が広大な大陸を支配していた強大国であったという偽史言説の強い影響が見受けられる。少なくとも二〇一〇年代までには、大衆が消費する歴史コンテンツに偽史言説が多数混入し、それが「正しい歴史」として受容されている現象が著しく見られる。少なくとも偽史言説は、歴史学界が危機感を感じるほど、書物とテレビなどという主流のメディアを通して積極的かつ広範に発信・受容されていると考えられているのである。

ここでいくつかの疑問が浮かび上がる。韓国で偽史言説はどのようにいち早く「大衆化」を達成したのか。そしてその過程で必ず関わってくるメディア環境はどのようなものであったか。それらについては先行研究の検討でも言及するが、まだ本格的に検討されていない。本稿では、偽史言説の「大衆化」が活発になってきたのが一九九〇年代から二〇〇〇年代に至る、二〇〇〇年前後の時期であったことに注目したい。韓国の民主化と経済成長が達成され、大衆文化の発達とメディア環境の変化に加え、PC通信とインターネットの普及という前代未聞の変革はすべてこの時期に起こった出来事である。最初に述べた本稿の目的はこのような背景に基づいている。

本論では、まず韓国の偽史言説に関する先行研究を検討し、その意義と課題を整理した上で、本研究の位置付けを明確にする。次に、一九九〇年代の大衆文学と二〇〇〇年代のインターネットコミュニティを中心に、偽史言説の「大衆化」を詳細に検討する。これらを検討対象とする理由は、それぞれがその時代を代表するメディアであり、偽史言説の消費及

び再生産の過程を確認できるからである。それを通じて、韓国の偽史言説がどのような背景と方法で「大衆化」を遂げたのか、またその意義について議論を進めたい。このような検討を通じて、韓国の偽史言説のみならず、日本の偽史言説についても新たな知見を得ることができよう。そもそも、韓国の偽史言説は日本・中国との歴史的関係を踏まえなければ理解できず、『桓檀古記』などの偽書は日本の偽史言説と直接的に繋がっているからである。^⑦

また、偽史言説の広がりや考察するにあたり、本稿では言説の「生産と消費」という用語を用いる。ここで「言説の生産」とは、特定の視点や目的を持つ発信者が情報を形作り、共有する過程を指し、「消費」は、受け手がその情報をどのように解釈し、再構築しながら受容するかを意味する。特に偽史言説においては、生産と消費が相互に影響し合い、偽史言説が繰り返し再生産される様相が特徴的である。

最後に、韓国の人名と出版社名として漢字の表記を確認できる場合は漢字で、漢字が確認できない場合、または固有語である場合にはカタカナで表記することを断っておきたい。また、引用した史料のうち、本稿の筆者が表記の内容を補うため加筆した部分や省略した箇所については、亀甲括弧内に記した。

- ① 呉座勇一「歴史学界と偽書『甲陽軍鑑』を事例に」（『ユリイカ』令和二年二月号、青土社、二〇二〇年）五四頁。
- ② 小澤実「偽史言説研究の射程」（同編『近代日本の偽史言説』勉誠出版、二〇一七年）三頁。
- ③ 「類似歴史学」または「似而非歴史学」という言葉は、英語の Pseudohistory の訳語でもある。キ・キョンリャン「韓国における類似歴史学の特性と歴史歪曲の方式」（『江原史学』三〇号、江原史学会、二〇一八年）八四頁。
- ④ ジョン・ヨンウク「欲望する歴史をいかに受け入れるべきか——似而非歴史学」批判」（若い歴史学者の会『韓国古代史と似而非歴史学』歴史批評社、二〇一七年）二九六頁。
- ⑤ キ・キョンリャン（同前）二八七頁。
- ⑥ 注④と同じ。
- ⑦ イ・ムンヨンは、植民地期に流行っていた偽史言説や思想が『桓檀古記』に影響を与えたため、日本の作家である鹿島昇がそれに着目し、『桓檀古記』を翻訳して日本に紹介したことを指摘している。イ・ムンヨン「『桓檀古記』の成立背景と起源」（『歴史批評』一一八号、歴史批評社、二〇一七年）六四―六五頁。

第一章 韓国における偽史言説研究の流れ

第一節 二〇〇〇年までの偽史言説研究とその背景

韓国の偽史言説研究は一九七〇年代から始まったと考えられる。檀君朝鮮の歴史を詳述し、その精神文化と民族意識を強調した『揆園史話』(北崖老人^{フゲノイン}の一九七五年作と記載されているが、偽書と判明)に関する批判が宋贊植^{ソン・チャンシク}「偽書弁」(一九七七年)で行われたのである。宋贊植は史料批判の必要性を強調し、『揆園史話』の記述が植民地期の大倅教系の言説と酷似している点、そして『揆園史話』の「解題」に、六九八年に渤海を建国した高王・大祚榮^{テ・ソニョン}の弟である大野勃^{テ・ヤバル}の著作という偽書『檀奇古史』が朝鮮時代の著作という『揆園史話』を潤色したと記してあることから、『揆園史話』が後代の偽作であると主張した。

本格的に偽史言説研究が行われるようになったのは、一九八〇年代後半のことである。韓国の偽史言説の中心的存在となった『桓檀古記』の登場(漢文本は一九七九年の光吾理解社版、一九八三年の倍達義塾版があり、韓国語訳は一九八六年に精神世界社が出版)と、その内容が社会一般に広まったことをきっかけに、歴史学界も反応せざるを得なくなったのである。これらの偽史言説の内容を簡単にまとめると、韓国の上古史は光栄に満ちており、歴史・考古学の通説よりも遙かに古い時代に、韓民族によって築かれた先進文明と帝国が存在し、他の民族を圧倒していたものである。後に登場する「大陸三国説」も、高句麗・百濟・新羅の領土のほとんどが朝鮮半島ではなく中国の黄河中下流域や長江中下流域、そして中国の東北地方(満州)にあったと主張しており、『桓檀古記』に由来する偽史言説の流れを汲んでいる。

もちろん、『桓檀古記』が登場する前にも偽史言説が存在しなかったわけではなく、偽史言説を主張する側と歴史学界は激しい対立を繰り返してきた。一九八〇年代までは、学術研究よりも討論や声明書の形で反論が行われることが多かつ

た。例えば、一九七三年六月二三日、朴正熙政権が「民族中心歴史教育実施」を目的として歴史教科書の国定化を宣言した際、歴史学界と教育界が批判的な態度を示した。また、一九七八年九月二十九日、歴史取り戻し協議会が民族主義的な偽史言説に基づいて教科書を訂正すべきであると国家を訴えた。それに強く反発した歴史学界は、一九七八年一月二三日に声明書を発表した。この声明書には、協議会の主張が非科学的であり、これまで学界はそのような荒唐無稽な主張を無視してきたものの、もはやそのまま放置できないほど協議会が国民を誤導しているという現実認識と危機感が込められていた。^①

一九八〇年には、文教部（現在の教育部）による第四次教育課程の改定作業の開始に伴い、大韓民国の初代文教部長官として李承晩政権の政治理念であった「一民主義」を思想的に支えた安浩相など「在野史学」の中心人物たちは、教科書に偽史言説を反映させるべく、一九八一年八月三一日に「国史教科書の内容の是正要求に関する請願」を提出し、「植民史観」に基づいた教科書の廃棄と、偽史言説の内容が反映された教科書の執筆を要求した。^② その結果、一九八一年一月二六、二七日に国会で公聴会が開かれたが、「在野史学者」たちの主張が国会議員に支持されることもあった。当時、文教部で実務を担当していたユン・ジョンヨンは、公聴会に出席した研究者たちの一般人向けの発表経験が少なかったこと、そして「在野史学者」たちが大衆向けのメディアや大衆との接触を通して多くの支持者を確保していたことを指摘している。^③ その結果、一九八一年二月三一日に公表された第四次教育課程では「民族共同体意識の高揚と国家意識が強調」されることになった。^④

シン・ソンヘ（二〇一九年）は第四次教育課程の古朝鮮（本稿では檀君によって建国されたという、紀元前の「檀君朝鮮」を意味する）と漢四郡関係の記述に偽史言説の影響が見られることを指摘しており、イ・ジョンビン（二〇一八年）は、一九八七年の「国史教科書編纂準拠案」に国粹主義者たちの影響が見られるとした上で、第三次教育課程までには具体的であった漢四郡の記述を簡略化するなど、第五次教育課程（高等学校は一九九〇年～一九九五年）を経て第七次教育課程（高等学校

は二〇〇二年以降に実施。その後、随時教育課程改定体制に移行）にまでその影響が及んだと述べている^⑤。第四次教育課程以降、偽史言説は主に民族主義的な記述の強化という形で一定の影響を与えることに成功したのである。しかし、漢四郡が遼寧省に存在していたという偽史言説が第四次教育課程では注釈で紹介されることはあったが、第七次教育課程までの歴史教科書にその主張がそのまま反映されたわけではなく、次第に漢四郡について詳述する形に変化していった。歴史学界と偽史言説の対立の最前線であった学校教育において、偽史言説が優位を占め、歴史教科書を通じて普遍的に発信されるようなことはなかったと言える。

一九八〇年代後半になると、歴史学界も古朝鮮を中心とした偽史言説の拡散に対し、より積極的に研究成果を発表するようになった。『檀檀古記』の公開後、一九八六年から一九九二年までの六年間に十一本の論稿が発表されたのである。^⑥

一九八〇年代から偽史言説を積極的に批判し、史料批判の根拠を整理した趙仁成（ジョ・インソン）は次のように述べている。まず『揆園史話』に関しては、韓致瀾（ハン・チヨラン）他『海東繹史』（一八三三年）の文章と論拠が見られたり、英語の Culture の訳語としての「文化」の用例が確認されたりするなど、偽書である証拠が多数発見された。^⑦一方、『檀奇古史』は渤海の歴史書であるとされているが、実際には独立運動家の李觀求（イ・クワンソ）によって一九四五年以降に書かれた『言行録』の内容が含まれているなど、一九四〇年代に作られたものと考えられる。^⑧また、古朝鮮時代に機械工場、飛行機、潜水艦などが存在していたという記述からも、その信憑性は極めて低いと言える。^⑨最後に『檀檀古記』に関しては、一九世紀末から二〇世紀初めに活動した思想家・宗教家である桂延壽（ケイ・ヨンヌ）が一九一一年に編纂し、その後、彼の後継者を名乗った思想家の李裕壺（イ・ユリョ）に渡され、李裕壺によって一九七九年に公開されたとされている。^⑩しかし、その公開の経緯も不明瞭で、「寧古塔」など古代には存在しなかったはずの地名が使われていることや、「男女平權」など近代の概念さえ見られる。^⑪つまり、これらの書物は近代以降の韓国が置かれた状況の中で芽生えた歴史意識や民族主義に基づいて創作されたものである。

史料批判によってこれらの書物が偽書であることが明らかになり、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、これらの

偽書や偽史言説を批判的に論じる研究が断続的に発表されたが、一九八〇年代のような活発な研究活動は見られなくなった。むしろ大衆の偽史言説に対する関心は高まりつつあったが、それに伴い、それまで蓄積された偽書・偽史言説を批判的に論じる研究の成果も一般に知られるようになった。例えば、韓国史と『桓檀古記』への関心が高まっていた一九九一年一〇月二日に放送された『歴史スペシャル』（KBS、一九九八年一〇月一七日～二〇一二年二月一三日）の「追跡！桓檀古記熱風」では、出演した歴史研究者たちが一貫して『桓檀古記』の古代史料としての価値を否定しており、その発言は先述した先行研究の成果に基づいたものであった。一般大衆向けに書かれた金三雄^{キム・サムウン}『韓国史を揺るがした偽書』（人物と思想社、二〇〇四年）でも、『桓檀古記』『揆園史話』『檀杳古史』が偽書であると判定されたが、これは彼が学界の研究成果を積極的に反映した結果であった。

一九七〇年代末から一九九〇年代にかけては、大衆に影響力を広めていた偽史言説や偽書に対する真偽論争が中心となり、これらの書物に対する史料批判が行われた時期であった。それに加えて、偽史言説を大衆教との関係で検討する動きが現れるなど、その後の研究の基礎はこの時期に築かれたと言える。

第二節 二〇一〇年代の状況と研究の流れ

二〇一〇年代から、偽書・偽史言説に関する議論が再び活発化した。特に、二〇一七年から二〇一八年にかけて研究が活発に行われた理由として、朴槿恵政府^{パク・グンヘ}の歴史認識に偽史言説の影響が顕著に見られたことが挙げられる¹²。朴槿恵政府が推進した歴史教科書の国定化は結果的に頓挫したものの、民族主義が強調された国定教科書最終本（二〇一七年）の内容には漢四郡の位置などにおいて、偽史言説の影響が見られることが指摘されている¹³。イ・ジョンビン（二〇一八年）は、このような記述と偽史言説の信奉者たちの活動を、先述した一九八〇年代の「古代史波動」の再燃として捉えている¹⁴。偽史言説の信奉者たちは、三六年ぶりに教育政策への影響力を再度大規模に拡大させようとしたと言えよう。

また、二〇一六年に植民史学解体国民運動本部の活動により、東北亜歴史財団の「東北アジア歴史地図」事業が中止に追い込まれるなど、偽史言説関係団体による歴史研究・発信活動への妨害が、歴史学界の怒りを買ったことも要因であった。偽史言説の信奉者だけでなく、一部の国会議員（東北亜歴史金曲対策特別委員会）が偽史言説系団体に同調したことは、歴史学界、特に若手研究者たちに衝撃を与えた。¹⁵

二〇一〇年代後半に偽書・偽史言説研究の再活性化を呼びかけたのは、『歴史批評』二〇一七年春季号の特集「偽史と偽書」であった。この号の目次を見ると、朴槿恵政府の歴史認識を標的にしていることが窺える。また、若い歴史学者の会『韓国古代史と似而非歴史学』（歴史批評社、二〇一七年）もこの年に出版された。『歴史批評』に掲載されたイ・ムンヨン「『桓檀古記』の成立背景と起源」（二〇一七年）は、真偽論争に焦点を当てるのではなく、その背景にある偽史言説の信奉者たちの歴史認識や、学界を批判するために用いられてきた論旨を批判的に検討している。イ・ムンヨンは、偽史言説の信奉者にとって歴史は理念のための道具に過ぎず、さらに彼らが近代日本の国粋主義の影響を強く受けていることを明らかにしている。つまり、日本による植民地支配の正当化を図るために用いられていた「植民史学」の後継者は歴史学界ではなく、むしろ偽史言説の信奉者たちであり、現実の歴史に失望した人々が虚構の歴史にロマンを求めているというのが彼の論旨である。このような指摘は以前から行われていたが、この論稿は偽史言説の影響力が強かった当時、その歴史認識の根幹を詳述した点に意義がある。また、社会に挫折感が蔓延すると、厳しい現実への絶望感を歴史から補おうとする現象の原因についても検討が必要であることが指摘された。

イ・ムンヨンは「一九六〇—一九七〇年代の類似歴史学の植民史学フレームの創造とその拡散」（二〇一八年）において、朴正熙政権による民族主義の拡散が偽史言説の拡大に影響を与えた事実を指摘している。¹⁷ また、講壇史学（歴史学界）は植民史学で、在野史学（ここでは偽史言説を意味）は民族史学であるという対立的な枠組みが形成されていく流れも詳述した。特筆すべきは、作者自身がブログを中心に一〇年以上にわたって偽史言説を批判し続け、その結果、偽史言説の信奉

者たちから強烈な攻撃を受けてきた経験が、これらの研究の背景にある点である。

そして、金時徳^{キム・シドク}「偽書批判から偽書研究へ」（二〇一七年）も、イ・ムンヨン（二〇一七年）と同様に『歴史批評』の特集に掲載された。金時徳は韓国でよく知られていない日本の古史古伝を紹介し、両国における偽書の存在とその背景、さらに宗教の影響力について論じている。偽書の誕生は過去の歴史や現在の状況に対する社会的な挫折感に支えられているという金時徳の結論もイ・ムンヨンと一致しているが、歴史学の枠を超え、より広範な視点から偽書研究の必要性が強調された。

趙仁成（二〇一七年）は、先述したように、『揆園史話』『檀奇古史』『檀檀古記』が「真書」ではないことを示す根拠と先行研究を整理した。史料批判に留まらず、朝鮮、清朝、倭国が連合して中国（漢）を制することができるという『揆園史話』の内容が、戦前日本の大アジア主義に類似している点、『檀檀古記』に日鮮同祖論の影響が見られる点から、偽史言説に「親日」的な性格があることを強調している。¹⁸過去には、偽史言説流行の誕生とその背景として独裁・権威主義政権の存在が指摘されてきたが、民主化以降においても偽史言説が依然として流行していることを指摘し、その社会的背景を検討することの重要性を強調した。真偽論争はすでに終わっているため、今後は社会的観点からその背景を検討すべきであるという主張は、韓国の偽史言説研究が次の段階に進む必要があることを示唆している。

二〇一八年にも、重要な研究が発表された。張信^{チン・シン}「儒教青年李裕崚と『檀檀古記』」（二〇一八年）では、『檀檀古記』を公開した李裕崚の生涯と履歴が詳細に検討され、それによって『檀檀古記』誕生の背景がより明確になった。また、イ・ムンヨン「幻作された檀檀古記」（二〇一八年）では、『檀檀古記』の創作過程が実証され、その成立の全貌が明らかにされた。

同時期に刊行された単行本としては、若い歴史学者の会『韓国古代史と似而非歴史学』（歴史批評社、二〇一七年）とイ・ムンヨン『類似歴史学批判』（歴史批評社、二〇一八年）が挙げられる。前者は、一〇本の論文と対談で構成されており

り、偽史言説の危険性が指摘されるとともに、有名な偽史言説に対して批判的な検討が行われている。後者では、韓国の偽史言説の始まりから「植民史学」という枠組み、さらに各偽史言説の詳細な検討が行われている。これらの著作は、それまでの偽史言説や偽書に関する総合的な整理・検討を行っており、韓国の偽史言説研究史において重要な位置を占めている。

ここで指摘しておきたいのは、先行研究における二つの課題である。第一に、真偽論争は事実上終わっている今、歴史学を超えた学際的研究を通じて、偽史言説が流行して偽書が受け入れられる背景を検討することが求められているが、それがまだ十分に行われていないということである。このような研究が進まなかった理由として、学界の研究成果が偽史言説の信奉者たちにまったく受容されず、真偽論争が繰り返されたことが挙げられる。第二に、「歴史大衆化」と偽史言説への批判との関係性について認識して検討する作業が十分ではなかったことである。この問題は、実は第一の課題と密接に関連している。『韓国古代史と似而非歴史学』所収の座談会「欲望する歴史をいかに受け入れるべきか―『似而非歴史学』批判」を見ると、本書の各著者が専門知識のない不特定多数の「大衆」を標的にしていることが分かる。「似而非歴史学」という名称自体が、大衆に理解されやすいように考案されたものであり、歴史研究者（または学界）の学問的な悩みや成果が、大衆の考えや立場とは大きく異なっていることも指摘されている。つまり、偽史言説に対する批判を含め、歴史学界と大衆との間に生じた歴史認識の相違をどのように縮めるべきか、そしてその関係性をどのように構築していくべきかが論点になっているのである。

言い換えれば、歴史学界の研究成果や言説に関係なく、偽史言説は大衆に馴染みやすい特性を持っているという現状認識が存在している。座談会でウィ・カヤが広大な領土を持っていた古代王朝へのロマンを求める人と出会った時の衝撃を述べているように、大衆の持つ排外的愛国主義に基づいた歴史ロマン的な欲望が指摘されている。大衆の中に広まっている偽史言説を批判する作業は、歴史学界にとっては「歴史大衆化」、すなわち歴史学界の研究成果や問題意識を大衆に分

かりやすく、かつ正確に発信する行為と結び付いているのである。

次章では偽史言説が大眾に接近していく具体例を検討する。偽史言説が「大衆化」を果たしていく過程と方法を検討することは、先行研究の課題を解決するための礎となるだろう。

- ① 「国史」探し」理論はデタラメ」（『朝鮮日報』一九七八年二月二四日）五頁。
- ② ユン・ジョンヨン『国史教科書波動』（ヘアン、一九九九年）二〇～二二頁。
- ③ 同前、九四～九五頁。
- ④ イム・ギファン「百済の遼西進出説と歴代の教科書の検討」（『韓国史学報』第六三号、高麗史学会、二〇一六年）一四〇頁。
- ⑤ イ・ジョンピンは二〇一七年の国定歴史教科書について論じているが、その背景として第四次教育課程が言及されたのは、韓国社会における国粹主義と偽史言説の結合が注目されたからである。イ・ジョンピン「国定歴史教科書の韓国古代史の記述と類似歴史の問題」（『歴史教育研究』第三一号、韓国歴史教育学会、二〇一八年）三二頁。また、本文の内容と第四次教育課程の古代史記述については次の資料を参照されたい。シン・ソンヘ「第四次教育課程高等学校国史教科書の古代史記述の特徴と背景」（『大邱史学』第一三六輯、大邱史学会、二〇一九年）二〇～二二頁。
- ⑥ 趙仁成「『撰國史話』・『檀奇古史』・『桓檀古記』偽書論の成果と課題」（『東北亜歴史論叢』五五号、東北亜歴史財団、二〇一七年）二六四頁。
- ⑦ 同前、二六八頁。
- ⑧ 同前、二七五～二七七頁。
- ⑨ 大野勃著、高東永訳『檀奇古史』（ハンブリ、一九八六年）第一一世檀帝五十六年。
- ⑩ イ・ムンヨン「幻作された『桓檀古記』（『韓国史学史学報』三八号、韓国史学史学会、二〇一八年）二九九頁。
- ⑪ 趙前掲論文、二八二～二八三頁。
- ⑫ ソン・ヒョンソク「朴權恵と『ファンバ』、北朝鮮を真似ているのか」（『プレシアン』、二〇一六年一月七日、https://www.pressian.com/pages/articles/143846?no=143846&ref=nav_search）（二〇二四年九月二二日最終閲覧）。
- ⑬ イ・ジョンピン前掲論文、二七頁。
- ⑭ 同前、二八頁。
- ⑮ アン・ゾンジョン「はじめに」（『若い歴史学者の会『韓国古代史と似而非歴史学』歴史批評社、二〇一七年）八頁。
- ⑯ 同前。
- ⑰ イ・ムンヨン「一九六〇～一九七〇年代の類似歴史学の植民史学フレイムの創造とその拡散」（『歴史問題研究』（歴史問題研究所、二〇一八年）「四」、朴正熙の長期執権と類似歴史学の拡散」を参照。
- ⑱ 趙前掲論文、二九〇～二九五頁。
- ⑲ ウィ・カヤ「欲望する歴史をいかに受け入れるべきか——『似而非歴史学』批判」（『若い歴史学者の会前掲書』二九九頁）。

第二章 大衆文学と偽史言説の結び付き——一九九〇年から二〇〇〇年まで

第一節 メディア環境の変化と『退魔録』ブーム

韓国社会において、一九九〇年代は特別な過去として記憶されている。イ・ファジン（二〇一四年）は、人気ドラマ『応答せよ1994』（tvN、二〇一三年）に見られるように、韓国の大衆文化において一九九〇年代が郷愁や復古の対象として認識される傾向があることを指摘している。^① また、元国会議長である金振杓も「一九九〇年代中盤までは確かに自由で個性溢れる、樂觀に満ちた感覚や雰囲気のようなものがあつた。新しい時代が開かれるという期待感が、絶頂に至った経済的豊かさ」と自信が社会全体に溢れていた時期であつた」と回顧している。^② ジュ・ウンウ（二〇一〇年）によると、政治的民主化が進み、検閲の緩和、創作・表現の自由の拡大、政治・文化活動に積極的に参加する大衆の登場、情報化の促進、女性の社会的地位の向上、消費社会の台頭と広告市場の発達、個人主義の浸透などの変化がこの時期に現れた。^③ この変化の中で、メディア環境も大きく変化した。ジョ・ドンウォン（二〇一五年）によると、一九八〇年代から小型パソコンの普及が進み、オンライン通信も可能になったが、一九九〇年代になると、通信は個人の趣向の表出と政治的発言が自由にできる場となり、「個人のレベルで自己表現と社会的コミュニケーションを電子的に可能にしつつ、ユーザーが積極的にオンラインコミュニケーションに参加する今日の文化が本格的に始まった」とされる。^④

大衆文学も、このような変化の中で新たな展開を見せていた。PC通信の普及により、作家と読者との活発なコミュニケーションが求められ、連載や執筆の様相が従来の紙媒体とは大きく異なる「通信文学」が登場したのである。韓国で初めて大衆の注目を集めた通信文学は、李愚赫の『退魔録』（トゥルニョク、一九九四～二〇〇〇年）であつた。日本でいう伝奇小説に相当するこの長編小説は、一九九三年七月からPC通信サービス「ハイテル」の趣味掲示板に連載され、人気を

得て出版に至った。『退魔録』は読みやすい文章と独特なキャラクター設定、そして『ロードス島戦記』など日本の幻想文学が徐々に人気を集めつつあった時代背景にも支えられ、完結まで一〇〇〇万部の販売部数を達成し、通信文学としては初めて国民的ベストセラーとなった。この作品は、韓国の文学史や大衆文化史にその名を刻んでおり、当時の新しいメディア環境をも象徴する。

本稿で特に注目すべき点は、『退魔録』の内容が偽史言説の強い影響下にあったことである。『退魔録』の基本的なあらすじは、韓国人の退魔師四人組（玄岩、朴神父、スンヒ、ジュンフ）が力を合わせ、不思議な事件で被害を受けた人々を助け、最終的には悪魔や悪の秘密結社などに立ち向かうというものである。「悪」に対する「善」は、特に朴神父と玄岩の台詞や生き方から強調されるように、命を重んじ、人を愛し、悪に屈しない強くて温かいヒューマニズムである。しかし、それを表現するための手段として民族主義と偽史言説が用いられているのは見過ごせない。例えば、国内編のエピソード「草薙剣の秘密」では、中世日本の南北朝時代における南朝が正統性を確保するために、韓民族の祖先とされる檀君の「神物」と、その鍵となる草薙剣を手に入れようとし、南朝側の武将である楠木家と倭寇、そして現代日本の術師たちに対抗する退魔師たちの戦いが描かれている。つまり、日本の南北朝時代と韓国の高麗時代、両国の古代神話を背景に設定し、呪術による巨大な規模の抗日が行われているのである。さらに、国内編「臥佛が起きると」でも、日本に対抗するために展開された巨大な呪術がテーマになっている。

そして混世編から、本格的に偽史言説の影響が見られるようになる。『檀檀古記』所収の『太白逸史』には、中国神話の英雄である軒轅を屈服させ、韓民族による大帝國を築いたという蚩尤天王の業績が詳述されている。『退魔録』では、蚩尤天王が東アジアを平定した後、預言者でもあった王后のメクトルが『海東鑑訣』という予言書を残し、その予言に基づいて数千年後の現代を生きる退魔師たちの運命が綴られていく。李愚赫によって作られたオリジナルキャラクターであるメクトルは心優しく、世界の行く末を案じる善人として描かれており、ここでも「平和を愛する韓民族」のイメージが

垣間見られる。もちろん、作中には韓国人の悪役も多数登場しており、民族主義よりも普遍的なヒューマニズムと生命尊重の思想がもつとも重視されていることは確かである。しかし、「古代に大帝国を築き、日本人とは異なる善良な心を持ち、平和を求める韓民族」というイメージが作品の根底に存在していることも否定できない。つまり、『桓檀古記』の内容とそれをめぐる偽史言説は、文学的な想像力が付け加えられた形で『退魔録』後半部の壮大な世界観を構成する物語の中心軸として機能しているのである。

このように、強い民族主義に基づき、抗日と『桓檀古記』に影響された偽史言説を題材にしたエンターテイメントは一九九〇年代に多数発表され、しばしばベストセラーとなった。その源流は、著名な漫画家である金珊瑚^{キム・サンホ}によつて「偉大なる」古朝鮮の歴史が描かれた『大朝鮮帝国史』（東亜出版社、一九八九年）に遡ることができる。また、一九九六年から連載され、一九九七年に単行本化した李賢世^{イ・ヒョンセ}の長編漫画『天国の神話』（ヘナムメディア）は、『桓檀古記』を参考にしつつ、独特な歴史解釈と当時としては過激な性的描写が話題となり、韓国漫画史にその名を残した。つまり、一九九〇年代は『退魔録』に見られるような歴史認識や民族主義が反映されたエンターテイメントが広く生産・消費された時代であり、それらはいずれも『桓檀古記』を始めとする偽史言説こそが、隠蔽・毀損されてきた韓国古代史の真実に近いという共通認識に基づいて成立したことを指摘しなければならない。

さて、『退魔録』の場合はどうであったか。李愚赫はPC通信時代から現在に至るまで『退魔録』の誕生や大衆文学、歴史に関する多数の文章を投稿しており、それを通して李愚赫のこれらに対する認識と立場を確認することができる。中でも『退魔録解説集』（トゥルニョク、一九九五年）には、国内編と世界編で用いられた様々な素材と概念が説明されており、そこから複数の偽史言説に関する説明や文献を見つけることができる。「檀君の一二連邦とそれに関する説」で、李愚赫は檀君の一二連邦の一部がシメール文明に繋がる可能性があるとし、「近來活発な研究により、『桓檀古記』の事実性が立証されつつある」と述べている。^⑤ また、檀君の遺物「天符印」と古代文字「カリムト」、そして蚩尤に関する根拠資料

として『桓檀古記』が挙げられていることから偽史言説の影響が窺える。

李愚赫によると、当時、彼は二つの側面から批判された。一つは「文学性が乏しく、文章力がない」という文学の側面であり、もう一つは「在野史学に傾倒している」という歴史関係の側面であった。^⑥後者について、李愚赫は実証を重視する「講壇史学」に対して批判的な態度を示し、「たとえ桓檀古記が偽書であっても、少なくとも私はその内容すべてが偽作であり、目的性を持って書かれたという先入観は持たない」と自分の立場を明らかにしている。^⑦また、「在野史学」の荒唐無稽などところも批判し、特に偽史言説に基づく宗教については関わりたくないと明言している。しかしながら、偽史言説の内容を肯定的に受け止め、それを積極的に作品に取り入れたことは否定できない。『退魔録解説集』の参考文献には、極端な民族主義者であり、現代韓国における偽史言説の形成と拡散に多大な影響を与えた安浩相の歴史観が反映された『国の歴史六千年』（ハンブリ、一九八七年）も掲載されており、それも当時の李愚赫が偽史言説に多大な関心を持っていた証拠である。

李愚赫の発言から見ると、当時の彼の立場には「純文学」と「講壇史学」という二つの巨大な権力に対する抵抗の意味合いも含まれていたように思われる。しかし、当時のメディアで話題になったのは作中の偽史言説そのものではなく、急激に成長していた「通信文学」や「幻想文学」の先駆的存在としての位置付けであった。「在野史学」に傾倒しているという批判があったものの、『退魔録』が商業的に大成功を収め、その後、李愚赫は『倭乱終結者』（トゥルニョク、一九九八年）を経て『蜚尤天王記』（トゥルニョク、二〇〇三年）を執筆し、偽史言説的な世界観に基づく韓国風幻想文学連作を発表していく。このような幻想文学が人気を博し、ベストセラーとなった背景には、一九九〇年代を通じて政府、書店、出版社によって推進された大衆向けの読書運動と、読者の趣向が多様化した事実があったことも指摘しておきたい。^⑧

このように、一九九〇年代は大衆文化の発展と共に、『桓檀古記』の流行に支えられた偽史言説の拡散が著しく進行し、その影響下にあったコンテンツがベストセラーになる現象が見られるようになった。キム・ジョンビン『丹』（精神世界社、

一九八四年)のような先例があったものの、一九八〇年代まで偽史言説の生産の担い手は主に一部の専門家に限られていた。しかし、一九九〇年代に入ると、偽史言説はその内容を消化し、大衆向けに再生産する新世代の作家たちによって支持されるようになり、より多様な形とより広い範囲で影響を及ぼすようになった。この時期の偽史言説の大衆化は、PC通信の普及、大衆文学の成長、さらには読書運動といった社会的変化と密接に関わっていたのである。

第二節 一九九〇年代末の危機と『コリアドットコム』

『退魔録』の連載開始と同時期に、金辰明^{キム・ジンミョン}の『ムクゲの花が咲きました』(ヘネム、一九九三年)が発表され、一年で三〇〇万部の販売部数を達成した。本作は韓国の核保有やアメリカとの対立、南北関係、日本への抵抗意識をテーマにしており、当時大きな話題を呼んだ。金辰明はデビュー直後に有望な大衆文学作家として注目されるようになり、李愚赫と同様に既存の純文学の方法や方向性を断固拒否し、大衆向けの娯楽性と作家のメッセージを重視する立場を貫いた。その後も、好太王碑と日本の侵略を題材にした『カズオの国』(プレミアムブックス、一九九五年)、IMF経済危機(一九九七年)という厳しい現実で韓国固有の精神文化を強調した『天よ地よ』(ヘネム、一九九八年)などを次々と発表した。金辰明の小説には、歴史・政治・民族の問題が絡み合うことが多く、『退魔録』のように分かりやすい文章が多用されている。

金辰明の作品の中で、偽史言説がもつとも多く取り入れられ、物語の中心軸に設定されているのが、三〇万部の販売部数を記録した長編小説『コリアドットコム』(ヘネム、二〇〇〇年)である。本作のあらすじは、インターネットの普及が本格化し、インターネット関連企業が脚光を浴び、世界的に新自由主義とグローバル化の波が押し寄せていた当時を背景に、若い大学生キム・インソが、ある謎の解答を探し求める過程で韓民族の真の歴史と世界の秘密が明らかにされていくというものである。まず、この小説の創作に関わる社会的背景について検討しておきたい。

前作『天よ地よ』に見られるように、一九九〇年代末の韓国はIMF経済危機によって大きな衝撃を受けていた。ファ

ン・ギョンスク（二〇〇〇年）は、そのことについて次のように述べている。

一九九七年十一月二七日、突然迫ってきたIMF管理体制という新たな状況は韓国社会全般を揺るがす多大な経済的・社会的な衝撃と影響を与えた。外国為替危機による為替レートの上昇は我々の経済水準を一〇年以上も退歩させ、三六年間の植民地時代に加え、再度莫大な資本を有する先進諸国に経済的に従属される国家的な恥を晒すことになった。^⑩

ファン・ギョンスクのように、IMF経済危機に対する当惑と憤怒を表明した論者は枚挙にいとまがないが、特に「欧米先進国の資本による陰謀」という観点も少なからず存在していた。イ・ザンウォンは「IMF時代、再び『グローバル化』を考える」（一九九八年）で、アジア的価値ではなく欧米的な価値が勝利を収めたのは、欧米の巨大資本と政治家たちによる陰謀であり、その道具としてグローバル化が用いられたと主張する。^⑪そして、最大の被害者は韓国国民であることを強調し、無礼な欧米の態度を厳しく批判している。これらの論稿には、IMF経済危機によって韓国の民族的自尊心が大きく損なわれたという考え方が色濃く反映されている。

一九九〇年代の韓国社会では、反日感情も強まっていた。一九九九年に掲載された「ブレーキが壊れた列車 日本の右傾化」という論稿は、日本の政治家たちの靖国神社参拝や君が代の斉唱、自衛隊の軍事力増強を指摘し、日本の「右傾化」を強く批判している。^⑫さらに、「新しい歴史教科書をつくる会」による歴史教科書の編纂や、一九五〇年代から続く日本の政治家たちの植民地支配に関する「妄言」も一九九〇年代の日韓関係における重要な争点となり、大衆の反日感情を刺激していた。それについて、イ・ウォンドク（二〇一四年）は、一九九〇年代から日本の政治家による歴史認識に関する発言や行動によってもたらされる紛争・対立が以前の時代に比べてより深刻化したことを指摘している。その背景として、冷戦の終結と韓国の民主化、日韓関係の変化が挙げられる。^⑬さらに、一九九五年から一九九六年にかけて旧朝鮮総

督府の建物が撤去されたのも、日本による植民地支配と軍事独裁政権に関わる「過去史」について、その真相を解明したり、徹底的に批判したりして「清算」する「歴史の立て直し」と国家の威信を重視していた金泳三政権の決定によるものであった。^⑭ 金辰明の前作『天よ地よ』は、このような時代背景の中で生まれた作品であり、そこに偽史言説の世界観を加えたのが『コリアドットコム』である。

『コリアドットコム』の序文で、金辰明はフリーメイソンの資本によるインターネット支配を懸念し、韓国の精神文化によってそれが克服できる可能性を示唆している。それはIMF経済危機と急激なグローバル化によってもたらされた民族的な衝撃を、偽史言説に頼って克服しようとする試みに他ならない。さらに、本作は『桓檀古記』中心の偽史言説が、宇宙の理を数で解明しようとする数秘学によって、ムー大陸を沈没させた古代の大災害など、海外のオカルトや陰謀論と接続する構造を持っている。作中では繰り返し西洋、特にアメリカの冷静で自文化中心主義的な態度と、義理人情を重視する韓国文化が対比され、アメリカ人に見下される韓国人とその歴史を肯定する手段として、悠久なる古代史が求められている。実は悠久で偉大であった韓国史を縮小・歪曲した主体として中国と日本が挙げられ、西洋は資本の力で韓国の精神を支配しようとしているという認識が『コリアドットコム』の物語の前提となっている。

一方、西洋の資本はユダヤ人を中心とするフリーメイソンによって支配されており、彼らはアメリカの建国から現代のグローバル化に至る歴史の流れを裏で操っていたとされる。これらの設定により、韓国史のみならず世界史さえも表と裏がまったく異なり、本当の歴史は隠されていたという形の、一九七〇年代の日本で人気を得た半村良の伝奇小説の方法を彷彿とさせる論理が展開される。それは「序文」で金辰明が示した『コリアドットコム』の方向性と一致し、逆にユダヤ人と韓民族が対等であるという論理に繋がる。ムー文明によって世界の支配権を得たユダヤ人の経典『カバラ』に対し、精神文化を通して物質文明を克服し、温かい人間の心を保つ役割を担わされた韓民族と古代の経典『天符経』の存在が強調され、ついに世界は正しい方向に導かれていく。ちなみに、この八文字の「天符経」は『桓檀古記』所収の『太白逸

史』「蘇^ソ塗^ツ經典本訓」にも記載されており、その出典も不明瞭であるため、史料としてではなく、一部の宗教団体に經典として受容されている。

『コリアドットコム』の内容と設定は、『退魔録』と重なるところが多い。韓国で「外勢」とも呼ばれる日本、中国、西洋の物理的・物質的・精神的な「侵略」に対し、悠久なる古代史と豊かな精神文化を持つ韓民族がそれを克服していくという物語は、確かにIMF経済危機や現実の歴史問題で民族的自尊心を大きく傷つけられていた韓国人の読者にとって歓迎される内容である。それだけでなく、『桓檀古記』に基づく韓国の偽史言説を西洋に起源を持つムー大陸の伝説などと結び付け、その世界観を拡張させたのは大衆文学史の観点からは評価できるかもしれないが、陰謀論や他国の偽史言説と結合しやすい偽史言説の属性をも示している。

経済成長と民主化によって民族的自尊心が比較的に高かった時期に執筆された『退魔録』に比べて、『コリアドットコム』には外国に対する敵愾心と韓民族・韓国歴史の優越性を強調しようとする意図がより強く反映されている。『コリアドットコム』と同時期に刊行されたハ・ヨンジュンの長編小説『留記』(1999年)も、現存しない高句麗の史書『留記』を発見し、韓民族と「韓国的価値」の偉大さを世界に知らせ、日本と中国による歴史の歪曲を糾弾するという内容で、『桓檀古記』を起源とする偽史言説の影響を受けている。このような違いはIMF経済危機によって現れたと考えるのが妥当であるが、いずれも民族的自尊心を守るために偽史言説が求められていることは間違いない。

金辰明は二〇一〇年代まで、「歪曲された」歴史を立て直すことで民族的自尊心を回復することが重要であるという信念を変わず持ち続け、その手段として大衆文学を提示している。¹⁵一九七〇年代の日本でも伝奇小説が作家のメッセージを伝えるための手段として用いられたことを考えると、それは特に珍しいことではない。¹⁶『退魔録』の事例からも分かるように、偽史言説の専門家ではない作家が既存の偽史言説に触れ、意図的にそれを大衆向けに発信する行為が『コリアドットコム』でも見られる。しかし、少なくとも一九九〇年代には『桓檀古記』などの偽史言説を、一部でも史実として信

じていた李愚赫とは異なり、金辰明が『桓檀古記』やその類の偽史言説を心より信じていたという証拠はない。むしろ、金辰明は「今日の韓国社会に何が必要なのか」という問題意識に答えるために偽史言説を利用したと考えられる。作家の立場と目的によって、偽史言説の使い方も異なってくる。

大衆文学の作家たちによる偽史言説の大衆化は、偽史言説そのものの普及よりも、それに先立つ他の目的を達成しようとする試みに付随して遂げられたと考えられる。それは、偽史言説の生産と普及そのものを目的とする「在野史学」の担い手たちとは違って、彼らにとっては商品としての作品の販売と文学的メッセージの発信が最優先だったからであろう。その結果、偽史言説はエンターテインメントの一部として、多くの読者に普及することとなった。

① イ・ファジン「『九〇年代』を振り返る」(『大衆叙事研究』大衆叙事学会、二〇一四年)七〇頁。

② 金振杓『大韓民国は何を蓄積してきたか』(SIDEWAYS、二〇二四年)一〇一頁。

③ ジュ・ウンウ「自由と消費の時代、そして冷戦主義の始まり…大韓民国、一九九〇年代の日常生活の条件」(『社会と歴史』八八巻、韓国社会史学会、二〇一〇年)を参照。

④ ジョ・ドンウォン「韓国のデジタル文化史—パソコンの導入と大衆化を中心に」(同前、一〇六巻、二〇一五年)二〇一―二〇四、二〇七頁。

⑤ 李愚赫「退魔録解説集」(トウルニョク、一九九五年)一二三頁。

⑥ 李愚赫「李愚赫に対する様々な非難—解明と弁明二」(『作家李愚赫の公式ブログ』、二〇一七年五月一日。初出は一九九〇年代のPC通信またはその後のホームページであると考えられるが、具体的な掲載日は不明である。<https://blog.naver.com/woohyuk518/221003884284>) (二〇二四年九月二一日最終閲覧)、李愚赫「李愚赫に対する

様々な非難—解明と弁明三」(同ブログ、二〇一七年五月一日。初出については同前。<https://blog.naver.com/woohyuk518/221003885627>) (二〇二四年九月二一日最終閲覧)。

⑦ 李愚赫「李愚赫に対する様々な非難—解明と弁明二」同前。

⑧ 詳細はユン・クムソン「一九九〇年代中後半期における読書大衆化運動の研究—読書運動と読書傾向を中心に」(『我が語文研究』我が語文学会、二〇〇八年)を参照。

⑨ イ・ヘニョン「脱植民主義と大衆的映像化」(『文学と映像』文学と映像学会、二〇〇一年)二二四頁。

⑩ ファン・ギョンスク「IMF事態と韓国社会の変化」(『市民教育研究』三〇巻、韓国社会科学教育学会、一九九九年)三五五―三五六頁。

⑪ イ・ザンウォン「IMF時代、再び『グローバル化』を考える」(『月刊 社会評論 キル』九八巻一号、社会評論、一九九八年)一〇七頁。

⑫ イム・ピョンゴル「ブレーキが壊れた列車 日本の右傾化」(『統一韓国』一八九巻、平和問題研究所、一九九九年)。

¹³ イ・ウォンドク「韓日関係と歴史葛藤…金泳三政権の対日歴史外交を中心に」（『日本研究論叢』四〇巻、現代日本学会、二〇一四年）二四三～二四四頁。

¹⁴ キム・ジョンミ「五〇年ぶりに清算された植民地の歴史 朝鮮総督府庁舎の撤去」（大韓民国政府国家記録院「記録で出会う大韓民国」作成日不明。https://www.archives.go.kr/theme/next/koreaOfrecord/joseonChongdo）（二〇一四年九月二二日最終閲覧）。

¹⁵ 金辰明「金辰明『大衆小説家、有意義で誇らしい呼び方だ』（YES 24『CHANNER YES』会ったかった、二〇一三年七月二日、https://

ch.yes24.com/Article/View/22493）（二〇一四年九月二二日最終閲覧）。

¹⁶ 詳細は朴起兌（パクキテ）「近現代『伝奇小説』概念の変遷と『伝奇ロマン』の誕生」（京都大学文学研究科博士学位論文、二〇一三年）を参照。特に半村良、五木寛之、平井和正などがその代表的な作家で、作家のメッセー지를「伝奇小説」というジャンルの大衆文学を通して読者に広く発信したいという方向性は金辰明のそれと一致する。

¹⁷ 注¹⁵と同じ。

第三章 二〇〇〇年代のインターネットの普及と歴史コミュニティの成長

第一節 インターネットの普及と歴史サイトの台頭

一九九〇年代以降、韓国におけるインターネットの普及は急速に進展した。一九八二年五月三一日に最初のインターネット接続が行われ、一九九七年には一六三万人であったインターネット利用者は、一九九九年には一〇〇〇万人を突破し、二〇〇四年には三〇〇万人を超えた。^① わずか七年で、ほぼ全国民がインターネットを利用するようになったのである。その背景には、金泳三・金大中の両政権による積極的な普及計画があった。^② 韓国最大のポータルサイトであるNAVER（一九九九年にサービス開始）とDAUM（一九九五年にサービス開始）も、インターネットの普及によって急成長を遂げた。しかし、このような普及はネット上での民族主義の拡散とも密接に結び付いていた。

二〇〇〇年代にも、韓国における民族主義の影響力は衰えることなく、むしろ一層強まっていた。一九九〇年代に激化

した日韓の対立は、二〇〇二年のサッカー・ワールドカップ共同開催によって一時的に好転したものの、「日本海」表記問題、領土問題、歴史教科書問題、「嫌韓流」問題など、韓国の民族主義を刺激する事件は後を絶たなかった。ちなみに、二〇〇二年のサッカー・ワールドカップに際し、韓国でブームになったサッカー公式サポート団「赤い悪魔（ブルグアンマ）」のマスコットは『退魔録』に登場する蚩尤天王に他ならず、赤い悪魔は一九九九年から蚩尤天王をマスコットとして使っていた。^③ 前例のない好成績を収めていた韓国代表チームだけでなく、偽史言説のスターである古代の戦神・蚩尤天王にも関心が集まった。

また、二〇〇二年は中国政府によって東北地域の歴史を研究するプロジェクト「東北工程」（正式には「東北邊疆歴史與現狀系列研究工程」）が開始された年でもある。このプロジェクトには、中国政府が東北地域の安定した統治を図り、韓国または北朝鮮における情勢の変化に備え、中国の東北地域と北朝鮮に対する歴史的な影響力を確認または確保しようとする政治的意図が反映されていた上で、古朝鮮、高句麗、渤海に関する内容も含まれていたため、韓国古代史が中国史に編入されてしまうことへの強い反発が韓国国内で広がった。^④ 例えば、ソウル特別市長であった李明博の二〇〇四年の新年挨拶には、中国による歴史の歪曲に対する批判が明記された。^⑤ 二〇〇〇年代の韓国は、日本や中国と絶えず歴史問題で対立していたのである。

二〇〇〇年代の特徴は、インターネットの急速な普及と隣国との歴史問題の本格化という二つの局面が交差した結果、ネット上で多数のユーザーによる「オンライン民族葛藤」が一般化したことである。^⑥ リュ・ソクジン（二〇二〇年）によると、二〇〇一年から二〇一三年までにオンラインで発生した日韓の対立は三六件、中韓は一四件、日中は八件であった。^⑦ 韓国のインターネットユーザーは、ほぼ毎年、領土・歴史・スポーツ関係の対立をネット上で経験していたことになる。それが可能であったのは、ネット上のコミュニケーションが従来とは異なっていたためである。

「脱中央統制性」と「双方向性」という特性を持つインターネットというメディアでは、個人の自発的な参加と活動が

可能であり、「マスメディアによる一方的な世論形成を補完または代替できる可能性」があると考えられている^⑧。つまり、従来は一方的に情報を受け取る消費者にすぎなかった人々が、情報を生産・消費する「プロシューマー」に変化したのである。キム・ジョンギル（二〇〇六年）によると、二〇〇〇年代の韓国において、「インターネットメディアの討論スペースは、利用者の表現欲求を充足させ、市民の参画を活性化する方向に進化してきた」が、「合意の導出と寛容のレベルが低いだけでなく、合理的な根拠を提示しようとする努力が足りない」という問題もあり、「相反する、または異なる意見を調整・仲裁するための努力も十分ではなかった」状況であった^⑨。

このように、ネット上でのコミュニケーションが活発化する中で、歴史をテーマにするコミュニティやサイトも多数誕生した。ソ・イジョン他（二〇一三年）は、「韓国のサイバー民族主義ブームは、一九九五年にインターネットの商用化サービスが開始されて以来、二〇〇〇年にDAUMカフェが一〇〇万個を超え、インターネットブームが社会・政治的に進化したことによって発生した」と指摘している^⑩。DAUMカフェは一九九九年に、NAVERカフェは二〇〇三年にそれぞれサービスを開始し、歴史マニアたちが集まる場が提供された。偽史言説に関するカフェも当時多数作られたが、現在も運営・活動が行われている有名カフェとして「三太極（삼태극）^{サムテグク}」（二〇〇六年六月開設、二〇一四年六月二三日現在の会員数四二六三二名）、「韓民族の本当の歴史（한민족 참역사）」（二〇〇五年一月二日開設、二〇一四年六月二三日現在の会員数二八三〇一名）が挙げられる。二〇〇七年当時、これらのカフェを含めてDAUMでもっとも大きな三つの歴史カフェはすべて偽史言説系で、会員数は八四〇〇〇人を超えていた^⑪。二〇〇七年当時、DAUMとNAVERのカフェの数は合計一〇〇万を超えていたが、会員数一〇〇万以上のDAUMカフェはわずか一〇個程度であった。中でもワイン・ミリタリーなど、趣味・読書関係の大型カフェの会員数は数万人に登り、会員が一人以上のカフェは「大型カフェ」とされる状況で、先述した偽史言説関係のカフェの会員数は一つのテーマを持つカフェとしては決して少なくなかったことが確認できる^⑫。これらのカフェで見られる偽史言説の詳細については次節で後述する。

一方、二〇〇〇年代初頭に有名だった歴史コミュニティ・ウェブサイトとしては、KBSの歴史番組「歴史スペシャル」の視聴者掲示板が挙げられるが、今は削除され、当時の資料を確認することはできない。しかし、二〇〇二年二月の時点でこの掲示板には一日一〇〇件以上の投稿が行われ、偽史言説を含めて歴史に興味を持つユーザーたちの活発なコミュニケーションが見られていた。^⑬二〇〇〇年代に広く人気を得た偽史言説関係のサイトとしては、「我が歴史の秘密」(Coolnet、一九九九年開設)が挙げられる。二〇二四年現在は接続できない状態であるが、OhmyNewsの記事「我が歴史の秘密に会ってみてください」(二〇〇四年三月三日)には、このサイトの誕生の背景や開設者であるソン・ジュンヒの意図が、次のように詳述されている。

「[前略] 彼が運営しているサイトは、檀君王儉の四〇〇余年前の祖先である九黎(クリ)。偽史言説では「クリヨ」という従来の読みが好まれていない」国(桓雄(ファヌン。檀君神話に登場する、檀君の父とされる神)時代)の蚩尤天子の実証歴史に重点が置かれている。すでに我が国の歴史を記録した史書が存在しているにもかかわらず、我が民族の歴史が三〇〇〇年にも満たないと勘違いしていることを正すため、ホームページを開設したのが一九九九年のことである。去年(二〇〇三年)三〇万人が訪れ、一ヶ月半で一〇万人が訪れるなど、ネットユーザーたちから根強く人気を得ている。

「私は学士将校として勤務していました。当時、民族精神に大きな関心を持っていたことが私たちの本当の歴史を探することに繋がりが、我が国の古代史を勉強することになりました。一九八〇年代初め、国史取り戻しブームの際に林承國(イム・スングク。一九八六年、『桓檀古記』を韓国語に翻訳した)教授の『桓檀古記』を読み、影響も受けました」

彼が我が古代史について体系的に勉強し始めたのは、国内で韓国・中国の正史を比較して歴史を究明している民族史学者オ・ゼソン先生に会ってからのこと。[中略] 去年、古代史サイトとしては初めて青少年推薦サイトに推薦されたりもした。[中略]「小学生も入って分かりやすく読めるように、誇らしい我が古代史を易しくて面白く構成するのが私の希望です。しばしば入って揭示物

を読むうちに、胸の片隅で溢れ出す我が民族の雄大な力を感じることでしょう」^⑭

このインタビュアーは、偽史言説の大衆化を実践した当事者が軍人時代から民族精神に関心を抱いていたことが韓国の古代史を学ぶ動機となっただけでなく、偽史言説を代表する『桓檀古記』を読み、それから影響を受けるとともに、同分野の専門家との出会いによってより体系的に古代史を学んでいたことが記載されているため、偽史言説の大衆化を考える上で重要な資料である。一九八〇年代から二〇〇〇年代にかけて、偽史言説の主な生産者は、偽書の翻訳・研究・政治活動などに携わっていた少数の「在野史学」の専門家の枠を超え、大衆文学作家だけでなく、ついに平日には歴史とは無関係な本業に勤め、週末にインターネットをする会社員のような一般人にまで拡大していったのである。

一九九〇年代末から二〇〇〇年代までネット上には、多数のオンライン歴史コミュニティが誕生したが、現代韓国の偽史言説の流れを考えると、『桓檀古記』の公開からすでに二〇年が経ち、その前に流行していた安浩相、朴蒼岩パク・チャンアムなどによる偽史言説の誕生からも三〇年近い年月が経っていた。また、インターネットの普及により、それまで以上に多数の人々が書物やテレビ、講演会など、伝統的なメディアを利用することよりも容易に偽史言説の消費と生産に関わるようになったため、二〇〇〇年代に「ファンパ」（『桓檀古記』の盲目的な追従者という意味の俗語）と一括りにされていた偽史言説の追従者たちは、実際には一枚岩ではなく、既存の偽史言説とは異なる新しい偽史言説を積極的に生産・消費する者も新たに現れた。

このように、二〇〇〇年代にも相変わらず偽史言説の世界で人気を得る人々が登場したが、もはや偽史言説はネットユーザーたちの自発的な活動によって支えられるようになっていた。

第二節 新しい偽史言説の登場と「国粋主義 VS 反国粋主義のネットユーザー戦争」

一九九〇年代以来、韓国の偽史言説は『桓檀古記』を中心に再編されていた。『桓檀古記』が一九九〇年代から二〇〇〇年代の韓国社会に与えた影響は大きく、ネット上では「ファンパ」と「ファンカ」（『桓檀古記』などの偽史言説を強く批判する人々を意味する俗語）の論争が激化していった。その中でも、独特な歴史観を持ち、二〇〇〇年代にポータルサイトで活発に活動していた「ファンパ」のコミュニティが DAUM カフェ「韓民族の本当の歴史」（以下、正式略称である「ハンサ」という）である。

「ハンサ」の主張は、「我が『ハンサ』の『ノウハウと業績』（二〇〇七年七月七日掲載）という文章に集約されている。『ハンサ』が韓国政府を動かして歴史教科書検定制を採択させたといった内容も述べられているが、ここではそのような内容は省略する。本文で特に目立つのは次の三つである。

- ① 韓国の歴史は中国と華僑によって歪曲された。
- ② 朝鮮の王族（全州李氏）は華僑である。
- ③ 女真、契丹、突厥、倭、ブルガリア、ドイツなどは韓国の分派である。

このような主張は、ハンガリー人、テュルク人、モンゴル人など、ウラル・アルタイ系民族を一つのツラン民族として捉え、その統合と協力を主張する植民地期のツランニズムを継承していた偽史言説の大物である文定昌^{ムン・ジンチャン}の主張から影響を受けたように見える。また、韓国の歴史が中国によって歪曲されたという主張も、それまでの偽史言説でもよく指摘されてきた内容であり、特に新しいものではない。一三九二年に建国された朝鮮王朝の王族が華僑であると主張し、彼らを忌

み嫌うのは独特であるが、朝鮮王朝が中国の優位を認めて仕える事大主義を貫いていた軟弱な国であったという認識を根拠に、既存の偽史言説では低く評価されていたことを考えると、理解し難い主張ではない。

「ハンサ」の最大の特徴は、『演史』と『清然史』という非公開史書を主張の根拠にしていることである。以下は「ハンサ」がこれらの「史書」に関して説明している内容である。

〔韓国に残っている正史について〕内容は実証した結果、李朝時代（李芳遠〔朝鮮王朝の三代王である太宗、イ・バンウォン〕）に多くの部分が捏造されて再発行されたため、内容は歪曲されただけでなく、非常識であるため、信頼するに足りません。

そんな中、『桓檀古記』と『演史』が現れました。

本カフェにおいて歴史を判断する基準は、この中では韓民族の歴史記録である『演史』です。

本カフェの運営陣は、『演史』の主な内容について研究した結果、これが事実であることを確認し、これを広く発信するためにこのカフェを開設することとなりました。

『演史』は、高麗の末裔である女真族（満洲族）が明国（中国）を征服した時、清朝・太宗の息子である順治帝が南京（明国の都）を支配下に収め、史官に「太祖は、わが韓（汗）民族の歴史は悠久なるが、記録が足りないとおっしゃった。明皇室書庫にあった史料の中から、韓民族の歴史を個別で整理せよ」と命じたことによって作られた韓民族専門の歴史書ですが、清朝が滅亡し、私家に保管されていた写本をサムウ先生が偶然に当時の関係者の末裔に会って入手することになった、とても珍しい韓民族の歴史資料です。¹⁶⁾

この内容から、「ハンサ」が『桓檀古記』の權威を認めながらも、「韓民族の本当の歴史」として『演史』中心の新しい偽史言説を一般に発信することを最大の目的にしていることが分かる。『演史』の原文は公開されていないが、前の引用文によると『演史』の「研究」はすでに完了しており、残る課題は「広く発信すること、つまり「大衆化」すること

あるという認識が窺える。このように『桓檀古記』の権威が認められているため、『桓檀古記』と『演史』との違いについても次のように言及されている。

つまり、韓民族の歴史は約五、六〇〇年前、新羅地方で栄え、次第に北進し、最初の帝国であるジュシン（韓国の偽史言説において、古朝鮮についてのみ使われている特殊な呼び方）帝国を建て、世界各地に移動したと定義します。これが『桓檀古記』とは異なっているところです。私たちは『桓檀古記』の内容より『演史』の内容がより事実に近いと判断するため、韓民族歴史のすべての定義をこれに基づいて行います。しかし、『桓檀古記』が偽書であると判断するわけではありません。共通している部分もあるからです。¹⁷⁾

言うまでもなく、『演史』と『清然史』の写本、所蔵者とされるサムウ先生の正体は一度も公開されていない。重要なのは、『桓檀古記』を認めながらも、その言説とは異なる独自の偽史言説がネット上で十分な根拠が示されないまま自由に誕生していたことである。つまり、「ハンサ」は『桓檀古記』の権威に頼りながら、新たな偽史言説を創造し、それを『桓檀古記』よりも権威のあるものとして位置づけようとしたのである。二〇二四年現在、一般会員はほとんど活動していないが、二〇〇〇年代の「ハンサ」は二万人以上の会員を擁し、会員たちによる積極的な投稿が行われていた。運営陣が創り出した偽史言説が一般ユーザーによって受容され、さらに再生産される仕組みが、一時的ではあったが構築されていたのである。その仕組が長く維持されなかったのは、「ハンサ」の中心コンテンツとも言える『演史』と『清然史』が公開されず、「ハンサ」を批判する会員の投稿は「便所」というコーナーに移動させて閲覧不可にするなど、「ハンサ」による一方的な運営が行われた結果と考えられる。「便所」コーナーに「土着中国人の悪質な書き込み」という説明が記載されていることから、反中を掲げる「ハンサ」の意図が窺える。

このような偽史言説系コミュニティの活動に危機感を覚え、反発する人々も存在していた。OhmyNewsの記事「ファンパ、ファンカ、聞いたことありますか 国粋主義 VS 反国粋主義ネットユーザー戦争」（二〇〇七年一月三〇日）の内容を引用する。

このような「偽史言説が流行する」傾向に不満を持つ人々も少なくなかった。学界はすでに偽書と判定したため公式的な対応は控えていたが、ネット上で『桓檀古記』に反対するユーザーたちも少なくなかった。「中略」それ「偽史言説系のコミュニティの活動」に反対するファンカの代表的なケースが「dcinside 歴史ギャラリー」である。「歴ギャル」と呼ばれ、『桓檀古記』に排他的な立場を取っている。この歴ギャルで活動する論客たちは eglos（二〇〇三年から二〇二三年まで存在していた韓国のブログサービス）にブログを開設し、そこに『桓檀古記』を批判する文章を投稿している。

また、NAVERカフェの中でもっとも大きな歴史カフェである「復興 戦争と歴史」（現在のカフェ名は「復興」の場合、徹底的にファンカの立場にあり、ファンパのことを否定的に認識している。そしてネット上でもっとも専門的な歴史カフェと評価されている DAUM カフェ「我が歴史文化研究会」、通称「歴史文」の場合はどちらの立場にも立っていないが、事実上ファンパに冷笑的な態度を取っている。

ファンパとファンカは、互いの主張をめぐって論争することもある。その代表的な事例が「韓民族の本当の歴史」とNAVER知識（NAVERの知恵袋サービス）の歴史ディレクトリとの衝突であるが、「韓民族の本当の歴史」が積極的な態度を示さず、歴史ディレクトリの一方的な勝利として認識され、多くのネットユーザーに知られるようになった。¹⁸⁾

この記事からは、偽史言説を批判する側でも一般ユーザーが中心となり、積極的に論争に参加していた当時の雰囲気伝わってくる。その代表的な事例が、NAVERの大型歴史カフェ「復興」で多数見られる。例えば、二〇二四年現在、同カフェの特別会員である thwmunba（ニックネーム）は、eglos にも歴史をテーマにするブログを開設したことがあり、

引用文にもあるNAVER知識Eでの論争にも参加した人物である。それだけでなく、二〇〇七年から「復興」にも偽史言説を批判する多数の文章を投稿しているため、OhmyNewsの記事の内容を体現する人物と言える。彼は二〇〇八年三月六日から同月二六日まで「在野史学」を批判するための連載を行った。連載の目的について、彼は次のように述べている。

〔前略〕これからしようとする話は、まさにその「在野史学」に関して、である。先述した通り、すでに「在野史学」はあらゆるところに存在している。本屋に並べてある本のページを超え、インターネット、新聞、放送は言うまでもなく、映画や大衆音楽、ゲーム、マンガ：「メディア」と呼ぶことができるところにはどこにも「在野史学」がある。歴史にさほど関心を持たない人間だとしても、少なくとも「気になる何か」が存在していることぐらいは認識できると言っても良いだろう。それだけでなく、このような主張を広く発信していく人々の中には、社会への強い影響力を持つ人物もいる。〔中略〕これもまた先述した通り、彼らは決して自分たちの趣味活動について発信しているだけではない。私たちが常識として知っている「国史」の多くの内容が間違っており、韓国の歴史学界の研究者たちは私たちに本当の歴史を伝えないよう、歪曲を繰り返しているという主張を図々しく行っている。本当にそうだとしたらそれは大変なことであり、逆にそのような主張が嘘だとしても、大変であることは変わらない。どうしてそのようなトンデモ歴史理論と偽りに頼る謀略が大衆的に流行ることができるのか、文字通り我が社会の「水準」について嘆かなければならないからだ。〔中略〕とにかく誠に悲しくて惨めなことである。この文章は、私たちが感じている「悲しさ」「惨めさ」は果たしてどちらなのか、そしてどうしてそのようなことになってしまったのかを明らかにするために始まった。¹⁹⁾

これは学界の研究者だけでなく、歴史に多大な興味を持つ一人のカフェ利用者にも、偽史言説の拡散に対する危機感が共有されていた良い事例である。彼は四回の連載を行い、その後も度々偽史言説を批判する投稿を行い、会員たちによる活発なコミュニケーションが行われた。二〇〇〇年代以降、カフェを始めとする歴史コミュニティにこのような投稿が

蓄積され、数百回以上の閲覧数を記録することは珍しいことではなかった。

歴史学の研究者も一部活動していたものの、これらのコミュニティは基本的に匿名のオンラインコミュニティであり、歴史に関心を持っていれば誰もが自由に論争に参加できるようになっていた。それだけでなく、偽史言説を批判的に検討しようとするネット上のコミュニティが複数登場していたことも確認できる。例えば、二〇〇〇年代後半の egloos には歴史をテーマにするブログや投稿が公開される「歴史ヴァリー」が存在し、多数の歴史系ブログが開設された。thwmba だけでなく、先行研究で言及したイ・ムンヨンも「青信号の雑学多識」というブログを開設し、偽史言説を批判する投稿を積極的に行っていた。それを考えると、二〇〇〇年代におけるネット上の「歴史戦争」は、二〇一〇年代後半に行われた歴史学界の偽史言説批判に一定の影響を及ぼした可能性がある。

偽史言説をめぐって一般ユーザーによる活動が活発化した背景には、インターネットコミュニティの発展だけでなく、デジタル化された歴史資料（史料の原典・論文など）のインターネット上での公開が大きく関わっていた。韓国における歴史資料のデジタル化を研究したジュ・ソンジ（二〇一八年）によると、歴史系雑誌の刊行や大衆向けの歴史書の刊行以外にも、「歴史大衆化」に大きな影響を与えた要素として情報技術の発達が挙げられる。ジュ・ソンジが指摘する「歴史の大衆化」の流れは、これまで本稿で述べてきた「偽史言説の大衆化」の流れと一致している。専門家による知識を受動的に消費していた消費者が、情報技術の発達によってデジタル歴史資料を積極的に利用し、自らコンテンツを生産することができるようになったのである。実際、一九九九年から始まって二〇〇〇年代初頭に本格化した歴史資料のデジタル化によって、二〇〇〇年代の歴史研究の成果は一九九〇年代に比べて八六％増加し、テレビ時代劇の放映数も一九九〇年代に比べて二倍増加した²²。歴史資料のデジタル化は、インターネットにさえ接続していれば誰もが歴史資料を閲覧でき、それに基づいて自由に議論できる可能性を与えたのである。

このように、情報技術の発達とインターネットコミュニティの成長というメディア環境の変化は、偽史言説の大衆化の

みならず、それに関する研究成果の大衆化にも大きく貢献したと考えられる。二〇〇〇年代になってようやく、偽史言説の生産者は一般大衆のレベルに到達し、前例のない規模で偽史言説を消費・再生産するようになった。このような現象は、二〇一〇年代における歴史論争の背景として意義があり、二〇〇〇年代からは「在野史学」と「講壇史学」の専門家あるいは従事者という従来の対立構図だけでなく、インターネットユーザーを中心とした一般大衆が新たな対立の中核を担うようになったことを意味する。

- ① キム・ミョンジン「パソコンの普及とインターネット時代の到来」(我が歴史ネット『韓国文化史』国史編纂委員会、二〇〇五年、http://contents.history.go.kr/front/km/view.do?levelId=km_004_0060_0020_0030) (二〇一四年九月二三日最終閲覧)。
- ② キム・ンヨン「『ここから来る?』四三年前に始まったインターネット超強国の神話」(『ネットウディ』二〇一四年五月三十一日、<http://newsmt.co.kr/mview.php?no=2024053017241525087>) (二〇一四年九月二三日最終閲覧)。
- ③ ジョン・ビョクジュン「三足烏と蚩尤天王」(『ハンギョレ』二〇〇六年九月二七日、https://www.hanico.kr/arti/culture/culture_general/160578.html) (二〇一四年九月二三日最終閲覧)。
- ④ ジョ・ユンギョン「東北工程以降の韓中両国の認識の違いに関する比較研究」(『中国学』三二号、大韓中国学会、二〇〇八年、五六五～五六七頁)。
- ⑤ 李明博「『新年の挨拶』李明博ソウル特別市長」(『マネットウディ』二〇〇三年十一月三十一日、<https://news.naver.com/mnews/article/008/0000359560?sid=101>) (二〇一四年九月二三日最終閲覧)。
- ⑥ リュ・ソクジン他「オンライン新民族主義の政治化の可能性…韓・中・日のオンライン葛藤類型と拡散事例を中心に」(『韓国政治研究』二二卷三号、ソウル大学校韓国政治研究所、二〇一三年) 一五三～一五四頁。
- ⑦ リュ・ソクジン「デジタル記憶空間において民族主義が発現する方式に関する研究」(『民族研究』七五号、韓国民族研究院、二〇一〇年) 一〇〇～一〇六頁。
- ⑧ キム・ジョンギル「市民参加メディアとしてのインターネットメディア討論部屋—可能性と限界」(『談論201』九卷二二号、韓国社会歴史学会、二〇〇六年) 四二頁。
- ⑨ 同前、六九頁。
- ⑩ ソ・イジョン他「中国と韓国のサイバー民族主義の比較研究序言」(『世界政治』一八巻、ソウル大学校国際問題研究所、二〇一三年) 二四五頁。
- ⑪ ソン・ヨンデ「ファンバ、ファンカ、聞いたことがありますか 国粹主義 VS 反国粹主義 ネットユーザー戦争」(OhmyNews、二〇〇七年十一月三〇日、https://www.ohmynews.com/NWS/Web_View/article.asp?CNTN_CD=A0000778164) (二〇一四年九月二三日最終閲覧)。
- ⑫ 「NAVER「カフェシーズン2」初日から不具合が続く…会員たちは「失望」」(『スポーツ朝鮮』二〇〇七年八月三日、<https://sports>

chosun.com/news/news_o2.htm?name=/news/life/200708/20070804/78d23205.htm) (二〇一四年二月十六日最終閲覧)、「大型ポータル激し「カフェ」競争…DAUMは七〇〇万―NAVERは三五〇万」(『Edaily』二〇〇七年八月六日) <https://www.edaily.co.kr/News/Read?newsId=0190568583224696&mediaCodeNo=257&OutLinkChk=Y>) (二〇一四年二月十六日最終閲覧)。

⑬ ハン・ユンジョン「サイバー歴史攻防『上古史混乱している』」(『京郷新聞』二〇〇一年二月二日) https://m.khan.co.kr/culture/scholarship_heritage/article/200202212246271#c2b (二〇一四年九月十三日最終閲覧)。

⑭ クォン・ユンヨン「我が歴史の秘密に会ってみてくださる」(OhmyNews' 二〇〇四年三月三日) https://m.ohmynews.com/NWS_Web/Mobile/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0000172325#cb (二〇一四年九月十三日最終閲覧)。

⑮ マンチュリア「我が『ハンサ』の『ウハウと業績』」(KHAN-

おわりに

ここまで、一九九〇年代から二〇〇〇年代までの韓国における大衆文学とインターネットコミュニティを中心に、偽史言説の「大衆化」の事例を検討した。一九八〇年代までには、主に安浩相、林承國、朴蒼岩、李裕喆といった「専門家」たちが『自由』を中心に偽史言説を生産し、政治・教育政策にそれを反映させようと努めていた。しかし、一九九〇年代以降、急激に変化していたメディア環境の中で、彼らの影響を受けた新世代の大衆文学作家たちが偽史言説を受容し、再生産する様相が見られるようになった。ただし、その過程で『桓檀古記』の内容は作り変えられ、海外のオカルトや偽史

KOREA' 二〇〇七年七月七日) <https://cafe.daum.net/khankorea/6oea/8> (二〇一四年九月十三日最終閲覧)。

⑯ 寂しきジューシー「演史」(KHANKOREA' 二〇〇六年七月一日) <https://cafe.daum.net/khankorea/6Tsl/120> (二〇一四年九月十三日最終閲覧)。

⑰ 同前。

⑱ 注⑪と同。

⑲ thwunba「『在野史学』1. Introduction>「何ぞ、ふつと」」(NAVER カフェ「復興」 二〇〇八年三月六日) <https://cafe.naver.com/boohyeong/29246> (二〇一四年二月十六日最終閲覧)。

⑳ ジュ・ソンジ「歴史大衆化とデジタル歴史史料―歴史消費の変曲」(『歴史民俗学』五五号、韓国歴史民俗学会、二〇一八年) 三二頁。

㉑ 同前、三三頁。

㉒ 同前、三三頁、三八、四一頁。

言説と結合することもあった。例外もあるが、多くの作家にとつてもっとも重要な目的はエンターテインメントとしての小説の執筆であり、偽史言説の普及ではなかったと考えられる。しかし、『退魔録』と『コリアドットコム』の販売部数からも分かるように、偽史言説はより多数の大衆に広く発信された。

二〇〇〇年代になると、歴史資料のデジタル化が進み、個人のホームページ、ポータルサイトによるカフェサービスなど、インターネットコミュニティの活性化により、誰でも論文・史料を閲覧し、独自の言説を生産できる時代が到来した。偽史言説の受動的な消費者が能動的に議論に参加したり、独自の言説を生産したりするようになったのである。『檀古記』など、既存の偽史言説の影響を受けつつ、生産者にとつて都合の良い形の新しい偽史言説が誕生する事例も見られた。

このような事例から、一貫した流れが確認できる。まず、メディア環境の変化によってより多くの人々が偽史言説を消費・生産する主体となっていくことである。もう一つは、偽史言説を消費・生産する人々の範囲が拡大するのに比例してその内容も多様化していくことである。わずかに二〇年で偽史言説の生産と消費の様態は劇的に変化したのである。

偽史言説の生産・消費の主体が次第に分化し、権威ある専門家よりも匿名の個人の自発的な活動によって偽史言説が支えられるようになった。このような様相そのものが、偽史言説の「大衆化」を示している。今後、メディア環境がこれまでのように変化していくのであれば、偽史言説の生産・消費の主体はさらに分化し、その内容もさらに多様化していくと考えられる。実際、YouTubeやTikTokの登場により、次第に多くの人々が文字ではなく動画を通じてコンテンツを生産する時代が到来し、偽史言説の信奉者たちもその変化を受け入れている様子が見られる。同じく、偽史言説に批判的な歴史マニアたちも学界の研究成果と史料を閲覧し、コンテンツを自由に生産しており、メディアで拡散した「通説」を研究者がSNSやYouTubeを通して批判・検討したりすることも一般化している。二〇二四年現在、ネット上で「ファン

パ」の影響力が弱化したかのようにみえるのも、偽史言説に対する批判が学界と歴史マニアによって積極的に広められた結果でもある。

にもかかわらず、偽史言説の「大衆化」が「歴史大衆化」よりも成功したかのように見える理由は何か。これまでの内容から考えると、第一に、歴史と現実の複雑さと研究の難しさに比べ、二項対立の論理に基づいて大衆の民族主義的な感性を刺激する偽史言説のメッセージと方向性が、歴史にロマンを求める人々にとって遙かに魅力的であったことが挙げられる。歴史学の研究成果は、偽史言説の信奉者たちが求める都合の良い物語を提供するものではなく、そもそもそのために行われたものでもない。しかし、偽史言説は最初から信奉者にとつて都合の良い物語として誕生している。

第二に、偽史言説の信奉者たちの第一目標は学術研究ではなく、「大衆化」にあることも重要である。少なくとも韓国の偽史言説の信奉者たちは、「外国や売国奴によって歪曲されていない民族の真の歴史」が存在し、「植民史学または講壇史学に対抗し、本当の歴史を大衆に広く発信すべきだ」という一種の正義感に基づく信念を持っていることが多い。偽史言説の専門家たちが教育政策などを通じて偽史言説の公式的な発信を実現しようとした過去とは違って、現在では先述した正義感や信念に基づいて講壇史学（または植民史学）と戦うようになった一般人が、そうでない一般人に対して偽史言説を発信するようになったのである。ロマンを求める人々にロマンを提供するという、需要と供給が一致する環境が整っていた二〇〇〇年前後のような状況では、偽史言説の「大衆化」が著しいものに見えたのもおかしくない。

最後に、偽史言説の「大衆化」は、民族主義を刺激する事件が続発し、韓国史への大衆の関心が高まっていた時期と、インターネットの普及など、メディア環境が急激に変化していた時期が重なった結果と理解できる。もし片方が欠けていたならば、偽史言説の「大衆化」は実現が困難であった可能性が高い。偽史言説を断固拒否する雰囲気強い中であれば、たとえメディア環境が偽史言説の「大衆化」に有利な方向に働いたとしても、偽史言説は拡散せず、失速したかもしれない。

実際、二〇二四年現在、多くの偽史言説関係のサイトやカフェはもはや運営されておらず、閲覧もできなくなっている。ホームページやカフェでの偽史言説の生産と消費自体が時代遅れとなり、その内容も真面目に受け入れられなくなっている。その背景には、『桓檀古記』に対する体系的な批判が広まり、韓国社会で「絢爛たる古代史」を求める傾向が過去に比べて弱まったこと、『桓檀古記』が登場して以降、それを凌駕する偽書や偽史言説が登場しなかったことが、大きく影響していると考えられる。

これまでの内容から考えると、「歴史大衆化」は偽史言説の「大衆化」と根本的に異なっている。それは、学界の努力不足という問題ではなく、そもそも発信したい内容やその目的が根本的に異なるからである。また、偽史言説を根絶することも、個々の社会的な文脈の中で歴史にロマンを求めようとする傾向が歴史上何度も繰り返されてきた事実を考えると、不可能に近いと言える。両者の出発点が異なることを前提に、変化するメディア環境の方向性と偽史言説の流行の背景を理解し、ジョン・ヨンウクが述べたように、「史実を取り巻く数多い文脈について考えてもらうようにすること」^①こそ、「歴史大衆化」の実現において重要ではないだろうか。

① ジョン・ヨンウク「欲望する歴史をいかに受け入れるべきか―『似而非歴史学』批判」(『若い歴史学者の会』『韓国古代史と似而非歴史

学』歴史批評社、二〇一七年)二九七頁。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了)

The Popularization of Pseudo-Historical Discourse in South Korea and its Relationship with the Media Environment

by

PARK Kitae

The purpose of this paper is to examine the “popularization” of pseudo-historical discourse in Korea based on the changes in the media environment from the 1990s to the 2000s, and to clarify the process of its diffusion and transformation. In response to two issues addressed in previous research, namely the lack of interdisciplinary examination of the background to the spread of pseudo-historical discourse and the lack of examination of the relationship between the popularizing history and the critique of pseudo-history, I will analyze how pseudo-historical discourse has been accepted and reproduced.

This paper examines changes and provides specific examples of the media environment related to the production and consumption of pseudo-historical discourse from the 1990s to the 2010s. I analyze popular literature, Internet communities, and online controversies to elucidate the influence of the media environment on the spread of pseudo-historical discourse. In particular, this paper focuses on the impact of the growth of popular literature and the spread of the Internet on the “popularization” of pseudo-historical discourse.

Within this paper, I first summarize the trends, characteristics, and issues found in previous research on pseudo-historical discourse and forged writings in Korea. Before examining them, I divided the studies into those done prior to the year 2000 and those from 2010 onwards, and I confirmed that behind these studies of the diffusion of pseudo-historical discourse and its influence was a sense of crisis in the community of academic historians.

Next, based on the trends and issues dealt with in previous research, I saw the “popularization” of pseudo-historical discourse accompanying changes in the media environment from the dynamic perspective of “production and consumption” and classified the diffusion process. Specifically, I analyzed the content and characteristics of pseudo-historical discourse found in popular literature that had become popular in Korea in

the 1990s, the themes of pseudo-historical discourse in large online communities (“cafes”) created in the 2000s, and the historical background surrounding them. In this way, I have clarified that while pseudo-historical discourse displays patriotic and xenophobic characteristics, pseudo-historical discourse has been widely disseminated to the masses through popular literature, and that the spread of the Internet has transformed consumers of conventional passive pseudo-historical discourse into producers of it.

This paper elucidates these consistent trends of “popularization” of pseudo-historical discourse since the 1990s. Due to changes in the media environment, more and more people gradually became involved not only as consumers of pseudo-historical discourse, but also as active producers. This trend includes the acceleration of the spread of the Internet around the year 2000, and the confrontation between critics and followers of pseudo-historical discourse in the Internet controversies of the 2010s, and finally the process of the weakening power of believers. It also points out that the reinvigoration of criticism of pseudo-historical discourse in the late 2010s may have developed in continuity with the Internet debates that preceded it.

Through these studies, this paper examines the transformation of pseudo-historical discourse from a long-term perspective and dynamically elucidates its relationship with the media. It points out that the trend of consuming existing pseudo-historical discourses and producing original discourses through online communities where non-expert individuals can easily browse and freely use historical materials is an important insight into the “popularizing history” that has been sought in the academic discipline of history.

Keywords; Pseudo-History, Popular Literature, Internet Community,
Popularizing History, Media Environment